

特集

## 病院図書館員の専門性と役割

### 座談会

# 電子情報時代の病院図書館員の 役割と専門性

出席者：

奥出 麻里氏(川鉄千葉病院医学図書室司書)  
河合富士美氏(聖路加国際病院医学図書室司書)  
木下久美子氏(高山赤十字病院図書室司書)  
浜口 恵子氏(高槻赤十字病院図書室司書)  
前田 元也氏(司会：西淀病院図書室司書)

前田：本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。今回の座談会のテーマは「電子情報時代の病院図書館員の役割と専門性」と題して、2つの観点から論議ができればと考えています。ひとつは病院図書室を取り巻く環境の変化、とりわけニューメディアの登場にどう対応していくかという点です。図書館員の扱う情報媒体が、これまでの冊子体だけだった時代から、CD-ROMやオンラインによるデータベース情報へと多様化し、扱う範囲が広がったことや、End-user Computingの普及によって利用者が情報に直接アクセスして必要な情報を入手す

ることができるようになってきたことから、情報と利用者の仲介をする図書館の役割や存在意義が改めて問われはじめてきています。

これらの流れの中で、新しい時代の病院図書館員の役割や専門性について考えてみたいと思います。

もう1点は、これらの新たな役割や専門性を担う図書館員を取り巻く環境、特に配置の問題を取り上げてその必要性について話し合ってみてみたいと思います。

#### ●ニューメディアの長所と短所を理解して利用者へ

前田：ここで取り上げるニューメディアは、直接、図書館に影響を与えるだろうと思われるインターネットをはじめとする電子媒体に限定したいと思いますが、これらの媒体と病院図書室についてどのような印象やご意見をお持ちでしょうか。

奥出：インターネットを中心に、ふたつほ



写真右から、木下、浜口、河合、奥出、前田氏



奥出麻里氏

ど私の経験した事例を紹介しながら考えてみたいと思います。

ひとつは先日利用者から「千葉市の組織図を知りたい」という依頼を受けました。さっそく千葉市のホームページにアクセスして情報をさがしてみました。残念ながらそこからは求める情報を入手することはできませんでしたが、メールにその旨の質問を書いて送信したところ、数時間後その回答があり利用者に提供することができた事例です。

これは、直接、千葉市に電話をかけても得られる情報でもあります。こちらからお願いをして情報をもろうという関係ではなく、インターネットの情報を発信し共有するというネットワークの特質を活かしたもので、私たち図書館員にとって新しいレファレンスツールに十分になり得るのではないかと考えています。

もうひとつの事例は、『Nature』の最新号に狂牛病についての最新情報の記事が掲載されているということを新聞で読んだのだが、その論文が読みたい」という依頼を受けました。図書室にはその最新号がまだ到着していなかったため、『Nature Japan』のホームページにアクセスしてその情報を提供することができました。これまでなら、その号が図書室に届くまで待ってもらわなければならないことが、すぐに利用者の要求に応えられるという即時性が発揮された事例と言えると思います。

木下：インターネットが情報を相互に発信

し共有するネットワークであることや、これまでの冊子体比べて即時性があることなどの長所が紹介されましたが、図書館として取り入れていく場合には、インターネットで得られる情報には具体的にどんなものがあるかを明らかにしなくてはなりません。

また、情報は迅速に提供できることが望まれますが、インターネットではスムーズに接続できないときもありますね。

奥出：図書館としてインターネットを導入する場合、情報が欲しい時にいつでもすぐに入手できる環境であることが大切です。そういう面では、時間帯によってはアクセスするのに時間がかかったりする場合もあり、すべてをインターネットを通したサービスに変換するにはリスクが大きくてルーチンワークとして成り立たないと思います。サーチエンジンと呼ばれるホームページの検索にしてみても、必ずしも万能とはいえません。

前田：コスト面ではどうなのでしょう。インターネットに限らず冊子体から電子媒体に移行していく中で、図書館全体の図書予算というのは削減していくことになるのでしょうか。

木下：CD-ROMなどの電子媒体がすべて冊子体にとってかわるものではなく、どちらも情報入手のための手段として、購入する選択枝が増えたということでしょうか。でも電子媒体を購入するための予算が別途に確保できない場合、図書館全体の予算のなかで電子媒体と冊子体の占める比率は変わるでしょうね。流れとしては、電子化してメリットのある分野の情報は今後どんどん電子化されるでしょうから。

河合：私たち図書館員は、その情報の性質や利用者の要求も考慮しながら、冊子体がいいいのかCD-ROM版を購入したらいいのか、中にはどちらも購入しなければならないものもあるでしょうし、これまで以上に難しい選択をしなければなりません。また予算の配分や、所蔵スペースの問題など個々の図書室によってこのあたりの考え方は異なってくることだ

と思います。

前田：長所と短所をよく理解して提供していくことが求められているのでしょうか。そのことが私たちの新たな役割なのだと思います。私も同感なのですが、それでは図書室サービスがインターネットをはじめとするニューメディアを取り入れていくことで、図書館はいったいどう変化していくのでしょうか。

極端ですが、利用者が図書館に行かなくても画面上でニーズが完結するのであれば、図書館はもういらぬという意見もあるのですが・・・。

河合：図書館がなくなってしまうという意見があるということでしたが、それでは出版社の存在はどう変わっていくのでしょうか。なくなってしまうのでしょうか。医学の分野においても、電子出版のような形態が今後、増えてくることは十分に予想できますが、これまでの冊子体の出版が全くなくなることはないのではないかと思います。実際にその情報を、インターネットを通して得ようと思えば有料であることが多いでしょうし、もちろんお金を払っても得たい情報もあるでしょうが、そういう情報ばかりとは限らないわけですから。図書室にその本があればおそらく利用者は図書室を利用すると思います。

奥出：本が読みたい。現物が見たいという要求が逆に増えて高まっていくのではないのでしょうか。電子化されることで、利用者は今後、より多くの情報を検索することができる環境になっていくわけで、これまで知らなかった情報の存在を知るようになるわけですからなおさらだと思います。

浜口：利用者は今後、電子媒体とこれまでの冊子体の長所と短所を理解してうまく使い分けをしていくようになると思います。電子媒体からは得られない情報を冊子体に求めるだろうし、その逆もあると思います。情報の性質によって使い分けられるようになるのだと思います。

必然的に図書館は利用者の多様化するニーズに対応する必要があるのではないでしょう



木下久美子氏

か。

河合：今まで本でしか得られなかったものが、いろんな形態で入手できるようになってきたということなんですね。

病院図書室というのは、最新の情報を常に提供していかなければならないわけですから、そういう意味では電子化された情報は、冊子体に比べるとはるかに優れているわけです。その利点を活かせるものであれば積極的に取り入れていくことは当然ではないでしょうか。

前田：つまり、長所と短所を理解することが大切で、もともとの情報は変わらないんですね。情報の流通の形態が変わるだけで、情報の媒体がこれまでは冊子体だけであったものが、電子媒体であるとか、インターネットを通して入手できるようになったかの違いだけなんです。

大きな流れとしては、電子化してメリットがある分野の情報は今後どんどん電子化されていくということはあると思いますが、ニューメディアの存在自身が、これまでの冊子体を中心とした媒体から、すべてをとって変わるものではないということを私たちは理解しておく必要があると思います。

ということは、新しい媒体が増えたことで、図書館はなくなるどころかいちだんと忙しくなっていくということですね。これはたいへんですね。

#### ●利用の変化と図書館業務の変化



河合富士美氏

前田：それでは、これらの環境の変化を受けて、予想される利用の変化と図書館業務の変化についてご意見をお伺いしたいと思います。

浜口：まだ導入している機関は多くありませんが、イントラネットが構築されている病院では、図書室以外の部署から図書室にあるMEDLINEなどのCD-ROM検索ができて、必要文献の依頼もそのネットワークを通して図書室に送られてくるそうです。

これまでの顔の見えるサービスとは異なり、顔も名前も知らない職員からも突然依頼がきて、ビックリしているということでした。直接、図書室に行かなくても、イントラネットで文献が依頼できるのは便利という利用者もいます。確かに、文献依頼という側面からのみ言えば、そのニーズは完結しており便利だとは思いますが、発展性がないように思います。たとえば、図書室に来て何気なく「こういう検索をしたがうまくヒットしなかった」とか言われると「ではこうしてみてもどうでしょうか」という会話が成り立ち、利用者にも違った側面が見えてくるかもしれない。つまり、図書室に来るということは、ある情報を得るということ以外に何か付加価値があると思うんです。また、図書室とはそうあるべきだと、私は考えています。

いずれにしても、善し悪しは別にして、今後はイントラネットなどを利用したサービスが主流になってくるでしょうけれど。

その他にも、これまでだったら利用者が図

書室にきて、新着の雑誌などを、時間をかけてブラウジングしているという光景は当たり前だったのですが、最近は、求める文献のみを探して図書室を利用する人が多くなってきているとのことでした。利用者の利用方法も、ニューメディアの普及によって少し変わってくるのではないのでしょうか。

木下：図書館員と利用者が必要にあって話をするのは文献の複写料などの集金の時だけになりかねないですね（笑）。

前田：私もある図書館の方から、利用者の中でも、インターネットを利用されているだろうと思われる方の利用が最近減ってきているとお聞きしました。反対にまだこの方は、利用されていないだろうと思われる方は、従来通りらしいのですが。ニューメディアを上手に利用されている方は、図書館を使わなくてもそこで情報に対するニーズが完結しているのだといえるのではないのでしょうか。

そういう方々にも図書館を利用してもらうためには、私は図書館のレベルを今以上に上げていく必要があると思います。利用者が得られるのと同じ情報を入手・提供しているようでは、病院図書室の値打ちがなくなってしまうわけですから、それ以上のサービスの提供を目指していくことが大切です。バージョンアップをはかっていく努力が必要だと思います。

河合：あそこには本があってそれを貸し出しているところだと思われてしまったらもうそれ以上は伸びないと思いますよ。

木下：情報を扱っている部署で、あそこにいけば、必要とする情報についてのアプローチをうまくコーディネートしてくれると思ってもらいたいですね。

情報源である図書・雑誌・ビデオ・CD-ROMなどがあって、ない資料は他の図書館や機関を通じて入手してくれるだけでなく、パソコン通信やインターネットなどの膨大な情報源にアクセスするときにも、その効果的な利用を支援してくれるところ、としての役割が果たせるといいですね。

前田：レファレンスでは、図書館員がインタビューをする中で、利用者が求める情報を明確にしていったり、正確な情報へとアプローチしていくわけですから、そのプロセスはなんとかして確保することが大切だと思います。利用方法は変わっても利用者との接点は確保しなければならないと思っています。

浜口：それと同時に、私は利用者にもかきこくなって欲しい。図書室というものは、部屋（空間、スペース）・資料・専門的知識のある職員という3つのものが揃ってはじめて機能を果たすものだと思います。言い換えれば、その3つのものすべてを使ってこそ利用者はうまく図書室を利用していると言えるのではないのでしょうか。だから、どんどん我々を利用して欲しい。そして、我々図書館員も利用されるだけのものを持たないといけない。

ただ、今はニューメディアの波が押し寄せはじめている過渡期だと思いますので、私たち図書館員がそのあり方を模索しているように、利用者も使い分けの模索をしているのではないのでしょうか。この波にひととお洗われて落ちつけば、うまく使い分けて図書室を利用されるのではないかと、私は考えています。

#### <情報の発信>

前田：これまで、今後どのような変化が予想されるかという点についてご意見をお聞きしてきましたのですが、もう少し踏み込んで新しい時代の私たち図書館員の役割、専門性についてもご意見をお伺いしたいと思います。情報の発信という点ではどうでしょうか。

奥出：これまで、病院誌の編集に携わってきた図書館員は多いと思うのですが、それが印刷という形態ではなく、インターネットという発信の形態をとっていいわけですよね。

また、ホームページだけではなく、メールというのも実際便利なもので、郵便・電話・FAXと同じように使われています。

medlib-jといった医学図書館関係のメーリングリストや、medlib-lといったニュースグ



浜口恵子氏

ループなど、個人が情報の発信を簡単にできるようになってきたと思います。

前田：先ほど紹介されていた院内をコンピュータのネットワークで結んで、図書館にあるMEDLINEなどのCD-ROMの検索が、図書館以外の部署からでも検索できることもそのひとつの例でしょうし、身近なところで言えば、これまで各図書館で発行している図書室だよりなどに掲載していた、新着図書案内やお知らせを、院内外に向けて画面上で発信することもできますよね。

O-157の問題でもインターネット上で、最新の情報が流れましたね。それらの情報を発信したり、真っ先に取り入れたりすることも今後、必要ではないかと思っています。

浜口：これは図書館が発信するのか、病院として発信するのかという違いはあると思いますが、そのことにかかわっていくことの必要性は感じています。他部署との関係もあると思いますので、病院によってかかわり方は異なってくるでしょうが・・・。

#### <代行検索>

前田：現在、図書館員が、文献検索業務として行っている代行検索ですが、今後、利用者が直接検索できる環境が整えば、この業務は消滅してしまうのでしょうか。

河合：今、病院にはどんな部署にもコンピュータの端末が設置されていますよね。業務を行う上でも、どの職種も多かれ少なかれコンピュータを利用しています。これは情報



前田元也氏

の性格や、利用者にもよるとも思いますが、利用者は医療従事者であるわけですから、コンピュータに向かって業務をするよりも、臨床の現場に出て行きたいという思いの方が強いでしょうから、検索するためにわざわざ時間をさいてまで、ルーチンの業務以外に全員が全員コンピュータの画面に向かうでしょうか。この検索は図書館に依頼しようという部分も残ると思いますよ。

浜口：検索方法も、すべての方が完全にマスターされているわけではありませんから、不十分な場合は、図書館員がサポートする必要性はこれからも求められる役割だと思っています。

河合：それにCD-ROMの検索も、最新の年代だけを検索して“なかった”とあきらめてしまわれる方もいますので、そのあたりは、図書館員が、検索テクニックを駆使して提供してあげることも必要だと思います。

前田：当院では張り紙をしているんですよ。「検索されて必要とする文献がヒットしない場合は、どういう文献をお探しだったか、ご遠慮なく担当者までお申し出ください。一検索用のコンピュータのソフトが未熟なためヒットしない場合があります（お時間をいただければお調べいたします）」と・・・。その張り紙を見て、気軽に「○○○○がなかったよ」と声をかけてくれる利用者も実際にいて、そのフォローができています。

浜口：ないと言われた文献に限って本当はないものなんてないですよ。

木下：それに医師をはじめ医療従事者には、なかなか見つからない文献を画面の前で検索することに時間を使うより、実際の医療現場で治療にあたってもらうことに時間を使ってもらいたいですね。図書館員が代行する方が効率的な部分もあるでしょう。

前田：基本的には利用者自身が情報検索するにしても、まだまだ図書館員の技術サポートがいるということなのでしょうが、場合によっては代行検索も従来通り、図書館員に、求められる役割であるのでしょうか。

#### <情報の加工・評価・統合化>

前田：これまで、私たちは情報をそのまま利用者に提供するというので、基本的には業務が完結していたわけですが、果たしてそれだけで良いのでしょうか。情報をより利用者の求める形態にして提供する。あるいは、利用者の行う加工、統合化の手助けをすることも今後の業務の中に組み込む必要があるようにも感じています。ご意見をお伺いしたいのですが。

浜口：利用者の中には、得た情報を自分たちの求める形態に加工する手段とか、そういう環境が身近にない方もいるわけですから、そういう方には、コンピュータなどの環境を提供して、指導していくことも考えていかなければならないでしょうね。

奥出：それと同時に、得た情報の評価も必要かもしれません。検索結果の評価もそうでしょうが、雑誌の評価とか、コンピュータのソフトの評価とか、インターネットのホームページの評価などをしていく必要があるかもしれません。利用者も図書館員にこういったことを期待しているのではないのでしょうか。

#### <教育的側面>

前田：当院でも、医学中央雑誌のCD-ROMを導入したとき、医師以外の職種の方の利用拡大につながると考えていたのですが、思うようには広がりがありませんでした。しかし、一度利用された方は、その後も引き続き利用してい

ます。そこでなんらかの利用指導のようなものが必要ではないかと考えているのですがどう思われますか。

奥出：病院の隣に付属看護学校があるんですが、そのカリキュラムに文献の探し方という項目を入れてもらっています。もちろん冊子体の『最新看護索引』なども使ってもらうのですが、医学中央雑誌のCD-ROMも実際に全員にさわってもらいます。それをする事によって、必ず図書館や資料の利用につながってくるのですね。最近の若い看護婦さんなどは、コンピュータに対するアレルギーがないから欲しい文献がすぐに見つければ、冊子体よりは魅力を感じるみたいですよ。

#### <灰色文献の入手>

前田：灰色文献の入手ということも、今後その必要性が増してくるのではないかと考えています。利用者自身が直接にデータベースにアクセスをして情報を入手するようになってくると、情報に対する要求というのは必然的に高くなっていくわけですから、電子化されていない情報や、なかなか入手できない文献については、図書館に向けられてくるのではないのでしょうか。

河合：これまででも、国立国会図書館に依頼しても入手できないような情報も事実ありましたし、今後、そのような要求は出てくるでしょうね。

奥出：反対に、これまで灰色文献であったものが、電子化されるということも起こっていますから、入手は簡単になるかもしれませんよ。しかし、いつの時代もその谷間になる情報はありますから、それらの入手に私たちの役割はあると思います。

前田：利用者自身も最後の最後に図書館にやってくることになるのですから、その情報を入手するのはかなり難しいものになるでしょうね。

そのためにも今、病院図書室や医学図書館のネットワークがありますが、これにとどまらない館種を超えたネットワークを今後、確

立していくことも考えていかなければならないのではないかと感じています。

木下：そうですね。臨床医学の分野だけでなく、関連分野の情報要求も高くなっていきますから、これらの情報もインターネットなどのコンピュータネットワークを利用して容易に入手・提供できるようになるとよいですね。

#### <従来の図書館業務との関係>

前田：これまでニューメディア時代の病院図書館員の役割をいくつか挙げてみたのですが、従来の図書館業務との関係ではどうでしょうか。

奥出：私たちは利用者を中心に業務を考えていくわけですから、レファレンスなどの直接、利用者に情報を提供するサービスに当然のこととして時間を取られることになりやすいですね。

前田：必然的に受入れなどの整理業務は合理化していくべきですし、コンピュータなどの導入でそうやってきていますよね。

奥出：本来の単行書の整理であるとか、雑誌の整理ができなくなってしまうことがあって、そのジレンマみたいなものは確かにありますね。書架の本がバラバラになっていたり、雑誌架をあけたら雑誌が落ちてきたり（笑）、そんなことはないようにしなければいけないですね。しかし、どうしてもこの業務が後まわしになってしまう。

木下：この間、「図書室ってパソコンだらけですね」という看護婦さんがいてハッとしました。利用者も、パソコンを通しての最新の情報ばかりを求める人ばかりではなく、これまで通り整理された書架から情報を得る人もいるわけですから注意しなければなりませんね。

河合：それに病院の中に、勉強や研究に専念できる場所というのは、現在もそして将来も必要だと思います。自分の部屋があって、そこでできる人はいいですが、病院職員の多くはそういう環境にはないわけですから、そういう役割はこれからも図書館が果たしてい

く必要があると思います。いずれにせよこれから10年くらいが大きな変換期であると思います。CD-ROMによる検索は病院図書室にすでに定着してきていますが、その次の段階に入っているのでしょうか。

前田：従来の図書館のあり方も温存しながら新しい環境に適応していくのはなかなかたいへんなことなのですが、どれひとつとっても欠かすことのできない課題だと思いますので、頑張っていかなければならないと思います。

木下：これらのサービスは病院側の納得も得ながら進めていくことが大切でしょう。図書館員の個人的なサービスとして業務を広げていくと、あとで手がまわらなくなってしまう恐れもあります。これらが図書館の仕事なんだということをアピールして、院内のコンセンサスを得る必要がありますね。

### ●図書館員を取り巻く環境

新しい役割と専門性を発揮するために

前田：それでは果たして、これらの業務を支えるべきマンパワーが十分に確保できているかという点について話を進めたいと思います。病院図書室研究会や近畿病院図書室協議会が調査している統計があると思いますのでそれぞれ紹介していただければ幸いです。

木下：近畿病院図書室協議会の一番新しいデータ（『近畿病院図書室協議会年次統計調査報告書平成7年度』）では、担当者は平均1.4名。専任がいるところは54パーセントと全体の半分ですが、病歴などとの兼務で複数の担当者が配置されている施設があります。進んだところでは、複数の専任者がいる図書館もあります。

奥出：病院図書室研究会でも、今年調査した結果があるのですが、担当者が平均で1.6人でした。ひとりという施設が67施設で、ふたりというところが33施設ありました。回答数は110施設です。また、専任が60.7パーセントとなっています。（ほすびらるらいぶら

りあん 1996.21(4):179-191病院図書室研究会第2回統計調査報告書平成7年度)

浜口：兼任というところもかなりあるようで、この状況では、先ほどいわれた役割を受けて立つ状況にはないといわざるを得ないですね。

木下：ここに資料を持ってきたのですが、例えば大学図書館で図書館員ひとりがフォローする学生数は、公立の大学図書館で約140人、国立大学で約150人。私立大学で約255人ということですよ。

ほとんどの病院図書室では全職員が利用対象者となりますが、担当者ひとりで一体何人をフォローしていることになるのでしょうか。

浜口：医療法では確かに図書室を設置しないといけないという項目はありますが、内容に関しては何も触れられていないのが事実ですからね。

河合：私たち自身も考え方を改める必要があるのではないかと考えています。広辞苑に、図書館と図書室についてどう書かれているかご存じですか。図書室は「図書を納めている部屋」としか書かれていませんが、図書館は「図書、記録、その他の資料を収集保管し、必要とする人に提供する施設」とあります。だから私たちは図書室であってはならないのです。内容が図書館であるわけですから。図書館の大きいものと小さいものの違いではないんです。こうしたことを踏まえた上で多くの人に理解してもらうことが必要でしょう。

木下：最近の大学図書館の傾向のように、情報センターとかメディアセンターという名前も考えられるのではないのでしょうか。名称は大切ですよ。利用者も名前から、その機能や担当者の役割をイメージするわけですから・・・。

前田：そういうこだわりというのは、特に今、大切なんですよ。

河合：そうですよ。今、医療機能評価などにより「医療の質」が重要視されてきているわけですから、図書館を、単に非採算部門というらえ方ではなく、医療従事者の生涯教



育施設であるという認識をもってもらうようにアピールしていかなければならないと思います。医療機能評価の項目には、結構、図書館に関する項目がありますので、私たちももっと自信をもっていいと思います。

奥出：病院というところは、人の命をまかされているところなんですからなおさらでしょうね。病院図書室はその中でも要ですよ。そのあたりを院内外にアピールすることも、これからの私たちの大きな役割でもあると思いますね。近畿病院図書室協議会も最近ホームページを開設したとうかがい昨日アクセスしてみました。病院図書室研究会でも2月に立ち上げ、アップデートしています。

(病院図書室研究会：<http://www.bekkoame.or.jp/~satou/jhla.html>)

(近畿病院図書室協議会：<http://web.kyoto-net.or.jp/people/codanaca/index.html>)

浜口：病院内でも、図書館には司書という専門職員がいるんだという認識を広げていくことももちろん必要ですが、それを病院内にとどめないで広く社会にも認めてもらえるような働きかけも同時に必要だと思います。

前田：息が長い働きかけが必要でしょうね。身近な利用者にもわかってもらうのと同時に社会的にも認められるような働きかけが必要なんだと思います。

浜口：これだけ医療が進んできているわけですから、今頑張っている病院図書室の司書を“医学司書”という新しいカテゴリーを作って位置付ける必要があるように感じます。というより、そういう医学司書のための教育システムを作らないと、なかなか業務を実践することが難しいと思います。公共図書館の司書というのは、昔から伝わってきた技術を今でも活かせると思うんですが、私たちの場合は、それらの業務、技術を更に新しく作りなおしていかなければならないと思うんです。

厚生省にも、これらのことをよく知ってもらって力を貸してもらわないと私たちだけでは限界にきていると感じています。認定制度などいろいろな団体の協力も得ながらやって

いけば、病院図書室の存在もクローズアップされるでしょうし、専門職がいるという認識も広がってくると思います。

前田：今、私たちは業務にかなりの質と量を求められていて、たいへんな状況ではありますが、視点をかえれば、私たちの職種を理解してもらう上で逆にチャンスなのかもしれませんね。

浜口：それと社会的に働きかけしていくことはもちろん大切ですが、同時に私たちのネットワーク内でも、啓蒙というか働きかけが必要です。

前田：図書館の関係者にも私たちの役割を理解してもらうことも大切でしょうね。学校司書の方々もその頑張りが図書館全体にも理解されているように、私たちも頑張っていく必要がありますね。

浜口：振り返ってみると、これまで私たちは外へ向けての働きかけというのを、あまりしてきませんでした。身近な業務をこなすのが精一杯の状態でしたから。余裕がなかったというのが率直なところだと思います。

木下：図書館がその機能を果たすには、適正な人員配置と担当者の継続教育が必要であることをアピールしたり、改善を求めるよう関係機関に働きかけるには、より大きな力が必要ですね。病院図書室研究会や近畿病院図書室協議会などのネットワークが共同で、問題解決のための具体策などを検討していけるとよいですね。

前田：以前、製薬会社の文献サービスの自粛ということがあったとき、病院図書室に大量に文献依頼が流れてきましたよね。その時はたいへんでしたが、今からみれば、それだけ病院図書室が注目されたわけですから、今、ニューメディアで新たな注目が集まることは、とても良いチャンスであるのだととらえていくことが大切ですね。

私たちはPRが下手ですけどそれをまず克服していくことがカギではないかと思っています。

前田：今回の座談会では、本当にいろんな論議ができたのではないかなと思っています。今後、これをひとつのきっかけとして、話が発展して行って、議論が深まればいいなと思っています。最後に、一言ずつお願いいたします。

奥出：病院図書室なんて誰でもできるんだではなくて、お風呂屋さんにはお風呂屋さん学があるように、図書館には図書館学がある。そして司書学があるんだ。これは私の友人の言葉なんですが、とても印象に残っているのでもこれを最後の一言にしたいと思います。

河合：図書館に新しいパソコンが入ると大変で、悪戦苦闘してここまでやってきました。それでも5年前に比べると大きく変わったなあと感じています。大変だなあと思う人もいると思いますが、そのうちにパソコンの方が進化してくれる（笑）。わたしはこれからもそんな楽観論者で頑張っていきたいと思っています。

浜口：図書館員というものは、世の中の動きにいつも敏感であること、そして波に乗り遅れないように努力することが重要であると思います。インターネットはその1例です。私はまだしたことがありませんが、その必要性を痛烈に感じています。勉強のために自己

投資をして、自分を磨いていかなければと今日改めて思いました。

木下：病院の管理者が、医学情報や患者情報あるいは地域の医療情報など、いろいろな情報を管理して活用できるように支援する部署を重要と認めたとき、情報をあつかう部署の院内での位置づけが明確となり、管理責任者や適正数の担当者が配置されるのではないのでしょうか。そのとき、司書にはどのような役割が期待されるのでしょうか。情報の収集・管理・提供だけでなく加工・発信も含めた情報に関する部分で貢献できるよう、ウォーミングアップしておきたいと思います。

前田：以前、「図書館の人というのは、私が臨床をおこなう上での本当に心強いパートナーですね」と、言っていたことがあります。この言葉は今でも心に残っています。

図書館員というのは、情報を利用者が求める上でのコーディネーターなんだなと感じています。そこにこそ私たちの求める専門性があるのだと感じています。これからもそんな図書館員でありたいし、頑張っていきたいと思っています。

- - - - -

前田：本日はどうもありがとうございました。

（於：京都南病院）